御卒業おめでとう

令和２年度第72回

卒業証書授与式

式次第

1．開式のことば
2．国歌
3．校歌
4．卒業証書授与
5．表彰状授与
　1）日本私立中学高等学校連合会賞
　2）桃李賞
　3）皆勤賞
　4）クラブ功労賞
6．学校長式辞
7．理事長祝辞
8．祝辞
　1）福島県知事
　2）福島市長
　3）桃李の会会長
9．在校生代表送辞
10．卒業生代表答辞
11．式歌　仰げば尊し、蛍の光
12．閉式のことば

福島成蹊高等学校

式　　辞

三寒四温と申しますが、寒さの中にも春の温もりが感じられる本日、令和二年度第72回卒業式を挙行するにあたり、ご来賓、保護者の皆様のご臨席を賜り衷心より厚く御礼申し上げます。

ただ今ここに於いて、高等学校普通教育課程を修了しました卒業生諸君３５６名に、卒業証書を授与しました。卒業生諸君、卒業おめでとう。また、今日までご子息ご息女を育てられた保護者の皆様のご労苦に対し、こころからお祝いを申し上げます。おめでとうございました。保護者の皆様には、これまでの本校の教育に対するご理解、そして物心両面に渡るご協力を戴き衷心より厚く御礼を申し上げます。

本年度は今も尚終息を見ない、コロナ禍に翻弄された年度になりました。待ちに待った東京オリンピック・パラリンピックが延期され、学校生活に於いても様々な制限を受けた年として記憶される事でしょう。しかし、明るい話題が全く無かった訳では在りません。例えばハヤブサ２号の帰還は日本の科学技術を誇る偉業と言えるし、今後採取された岩石の分析が進むと、生命誕生への一縷の希望を与えるかも知れません。戻りますが、コロナ禍対応につきましては、生徒諸君もこの事態を冷静に受け止め、特に学校が設けたルールに沿って生活してくれました。この事に対し、心から感謝します。また、保護者皆様のご協力に対しましても、改めて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

さて、卒業生諸君は、十年前にも前代未聞の大震災を経験しました。自然災害とその後の人災の混乱の中、貴重な経験と学びをした事と思います。自覚は出来ないものの、諸君には困難を乗り越える力が備わって居ると思います。今般のコロナ禍対応にも、その力を垣間見ました。少し話題を変えますが、コロナウイルスの感染拡大の速さは、グローバル社会の人の行き来、そして物流の速度を実感させます、ある意味、私達の感覚を越えていると言って過言ではありません。その事を踏まえて尚、普通コースの台湾研修、文理選抜コースは初めてのマレーシア研修では在りましたが、海外の現実社会を見聞きし、そこから学んだ経験は貴重だったに違いありません。また、特進コースのカナダでもホームステイや、一貫コースはベトナムとカンボジアでの研修は、新興国・先進国・途上国のカテゴライズを越えて多くの学びがあったに違いありません。それぞれコース毎の研修エリアは異なれども、日本に居ては気づけない衝撃にも出会った筈です。思うに、相手の心に寄り添う姿勢のと震災時の実体験とを重合わせ、きっと心を通わせ合う事が出来た事と思います。どうか、その気持ちを持つ事と、相手の立場を思いやる大切さを忘れないで下さい。

所で、諸君は、伝統の一つ、“良き市民”として生活してくれた事を誇りに思

います。具体的には、挨拶の良さ、エレガントな制服の着こなし、公共の場での思いやり等、『校訓』の理念を生活態度で示してくれて嬉しかったです。更には、何事にも正攻法で取り組む姿勢が、結果的に学習・クラブ、生徒会、ボランティア活動でも多くの成果を残しました。特に、素晴らしいのは陸上競技クラブの全国大会２位入賞を初め、他にも沢山の良い成績を残した事です。また、水泳部・ギタークラブの全国大会常連校としての活躍や、多のクラブが県大会に進出し上位に入賞を果たした事は、本校の名誉であります。進路に於いても努力が実り、既に決まっている人も居りますが、受験真っ直中の人も少なくはありません。どうか、最後まで全力で戦い抜いて下さい。私は、諸君が必ず志望校に合格すると信じています。

ここで、贐に慣れ親しんだ校訓「桃李不言下自成蹊」の背景に触れます。校訓は前漢時代の武将“李廣”の生き様と、分けて語ることは出来ません。“李廣”は、文帝・景帝・武帝の３代の皇帝に仕えた、虎をも射抜く弓の名手でした。宿敵、匈奴の“単于”と勇猛果敢に戦い、かけがえのない邦と人々を守った武人です。敵には恐れられましたが、同時に篤実さで敬われました。没後、徳を惜しみ、司馬遷が『史記』の中で称えたのです。また、“李廣”が仕えた武帝は、西域への拡大を図った皇帝です。その結果、今日で言われる国際化が進み、人・情報・物が行き交う時代を作ったのです。また、この史実は時代を越え、人材とは何かを教えてくれます。それは一言で責任を全う出来る人の事です。その意味でも校訓の徒“李廣”は、真に救世主であり、人材でした。

ところで、諸君に取って次のステージは、どの様に写っているのでしょうか。恐らく、激しく変化に富む混沌たる社会に見えるのではないでしょうか。人に因っては、一歩踏み出すにも勇気が必要で、躊躇すら覚える。しかし、怯んでは成りません。そこは諸君の活躍の場であり、夢を叶えるステージでも在ります。これからは、家庭・学校の庇護下に在る甘さは許されません。何れの路も自分で切り開く勇気が必要です。その時に、必ず“桃李のスピリット”が支えてくれます。曰く“自分に厳しく・他を思いやり・真摯に努力する”のです。どうか、校訓の将“李廣”同様、掛けがえのないモノを守れる人になって下さい。

結びに、諸君の母校が、何時の時代も繁栄し、名実共に誇れる学校となすべく、尽力することを誓い私の式辞とします。

令和３年３月１日

福島成蹊中学校・高等学校

校長　本　田　哲　朗

祝　　辞

長く厳しかった冬の寒さを幾分残しつつも、そこ此処に新たな生命の息吹が感じられる今日の佳き日、福島成蹊高等学校３５６名の卒業生諸君、晴れてのご卒業誠におめでとうございます。新生活への期待を胸に、自分で選択した道へ歩を進める君たちに幸多かれと祈るばかりです。

本来であれば、卒業生を暖かく励まし支え、限りない愛情を注いでこられた保護者・ご家族の皆様、そして常日頃からご支援を賜っている同窓会・桃李の会役員の皆様始め、関係各所を代表する皆様から沢山の暖かい眼差しが注がれる中で卒業式を挙行出来ることを願っておりました。しかし、世界中が新型コロナ感染症の脅威に晒されている状況にあって、在校生やご来賓の出席をご遠慮いただくとともに、最も近くで関わってこられた保護者の皆様にも一定数に限られた中、式を挙行せざるを得なかった点は辛いところであります。しかし、晴れ晴れしい卒業生それぞれの表情こそが今日の式の意味合いの全てを表すものとの想いを致しますと、関係各位のご理解とご協力に厚く御礼申し上げなければなりません。

さて、学校法人福島成蹊学園は、大正２年(１９１３年)に、ここ福島の地に産声をあげて以来、幾多の変遷を経ながらも、校訓「桃李不言下自成蹊」の教えは一切変わることなく、１０７年の歴史を重ねる中で、卒業生２万８千余名を社会に輩出してまいりました。

開学当時、福島県内には５３の私学があったと聞いておりますが、当時あった私学のうち、今に至り存在する私学２校のうちの１校が、ここに臨んでいる卒業生諸君の母校であります。

先程、校訓は不変（不易）と申しましたが、４年前となる平成２９年度において、教育理念に「心を育み、叡知を究める。」、そしてその時代に相応しく、かつ、その時代に求められる教育を追求すべく、「感性と品性」、「知性」、そして「国際性」をキーワードとした新たな教育目標を掲げました（流行)。

つまり、私どもが、ここに臨んでいる卒業生に期待していることは、「桃李」の精神の下に、高い「志」を抱く中で「叡知」を追求し、それらを礎として「実行」する人たち（私はその人たちを「桃李の人」と呼びます）となることを願いながら、諸君と向かい合ってまいりました。「桃李の人」の一員に加わった卒業生諸君には、自信と誇り、そして気概をもって各人が描く次なるステージにおいて、果敢にチャレンジを重ねる人たちであると信じています。

ただし、諸君の次なるステージを取り囲む環境は厳しいものと覚悟する必要があるようです。昨年２月頃から何か徒ならぬ空気が漂い始めたのです。私自身、世の中がこれほど大きなうねり（コロナ禍）に呑み込まれるとは思いも寄りませんでした。

日本が直接の当事者となった直近の戦争から４分の３世紀を経た今になって、また、福島県民にとって決して忘れられぬ東日本大震災・東電原発事故発生から１０年の時を待つことなく、これ程大きな災禍が続くとは、私自身、感染症に係る過去の歴史的事実を承知していたとはいえ、容易に想定出来なかったこともまた正直なところです。

このような状況下、「危機の時」にこそよく見えてくるものもあるようです。コロナ禍の場合は、感染症予防の手段と大切さを知り、昨年秋ごろには大いに心配されていたインフルエンザの同時併行発症ですが、結果的には大きく減少しました。ホームステイ、リモートワークやオンライン授業などの言葉が行き交い、人生や生活を大きく見直す機会となりました。

また、ソーシャルディスタンスも叫ばれていますが、周囲の人を大切に思うからこその言葉でありましょう。人は本来、周囲の人と「近づきたい」、「寄り添いたい」、そして「助け合いたい」との欲求があるはずですが、今は有事の時ですので、場合によって「我慢」が必要です。

何れ、コロナ禍を経た新しい社会にあっては、本来の人間らしさを基盤としつつも、今とは違う生活様式も現れるに違いありませんが、人を想う「優しさ」はあらゆる生活にあって普遍なものと言えましょう。

目の前の社会環境厳しいものがありますが、諸君それぞれに選んだ道を、自分自身の責任の下、周囲の人々とともに歩むことになります。何れの歩みも、各人が決めた重要な道であり、長く遠い道程となることでしょう。

大きな未来に羽ばたく卒業生諸君が、それぞれの道を歩むに当たり、次代を果敢に切り拓く懼れぬ勇者たることを祈りつつ、理事会を代表し「エール」を送るものとします。

令和３年３月１日

学校法人福島成蹊学園

理事長　高　橋　幸　七

送　　辞

頬を撫でる風が心地よい季節になりました。春の訪れが感じられる今日の佳き日に、未来への希望を胸に学び舎を旅立たれる三年生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生を代表し心からお祝い申し上げます。

満開の桜のなか、真新しい制服に身を包み、この福島成蹊高校の校門をくぐってから早三年の月日が経とうとしています。今、先輩方の脳裏には、多くの方々との出会いの中で育まれた、かけがえのない思い出が浮かんでいるのではないでしょうか。私達にとって先輩方は常に一歩先を行く大きな存在であり、憧れでした。先輩方の背中を追いかける毎日の生活は、とても刺激的でした。

学校行事にかける先輩方の熱意と迫力にいつも圧倒され、パワーの違いを実感しました。桃李祭では、全校生徒が一つになる企画を立案して巨大壁画を制作したり、皆を楽しませるパフォーマンスで会場を大いに盛り上げてくださいました。また、舞台発表の堂々とした演技や工夫を凝らしたクラス展示の完成度の高さに、とても驚かされました。球技大会や体育祭では、勝利を目指してクラスが一致団結し、全力で楽しむ先輩方の姿がとてもまぶしかったです。学習や部活動に関しても、決して妥協することなく高い目標を掲げて真剣に打ち込む姿勢は、下級生の手本でした。夢を実現するにはひたむきに努力を続けて最後までやり抜くことだという、一番大切なことを私達に示してくれました。そして、共通テストの導入や新型コロナウイルスの影響など、社会の急激な変化にもひるむことなく、しなやかに粘り強く挑み続けた先輩方は成蹊の誇りであり、心から尊敬しておりました。私達下級生は共に学校生活を送ることで先輩方からたくさんのことを吸収して、日々成長していくことができました。本当にありがとうございました。

これから先輩方は新しい扉を開けて、自分の選んだ道を歩んで行かれます。その先には数多くの困難や思わぬ障害が待ち構えているかもしれません。しかし私

達は、先輩方ならどんな試練であっても必ず乗り越えていけると確信しています。でも、もし立ち止まってしまったとき、心が折れそうになったときには、この成蹊高校で学んだことを心の支えにしてください。そして、成蹊高校にはいつでも先輩方を応援している先生方や後輩がいることを思い出してください。私達在校生は先輩方が築き上げてきた伝統を受け継ぎ、いつまでも皆様が誇れる母校であり続けられるよう精一杯努力していくことを誓います。

最後になりましたが、先輩方のご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げ、送辞といたします。

令和３年３月１日

在校生代表　霜　山　怜　花

答　　辞

吾妻おろしの風も和らぎ、北へ向かう白鳥の声も空高く響き渡るこの良き日、私たち３５６名は、この歴史ある学び舎を巣立ちます。

思えば３年前、私たちは希望と不安を胸に、この福島成蹊高等学校の門をくぐりました。今仲のよい友人も、当時は話したことはなく、新しい環境に慣れることで必死だったことを覚えています。それから日々を過ごしていくうちに仲間と打ち解け、切磋琢磨しながら学習や行事、部活動に励んできました。

学習においては、今年度は入試が大きく変化し、その波に応じて一つ一つ対応しなければなりませんでしたが、それぞれのコースで目標進路に向かって精一杯取り組みました。その中で、特に文理選抜コースは１期生としての自覚を持ち、粘り強く文武両道に励みました。

学校行事では、１年次の合唱祭では美しいハーモニーを響かせ、２年次の桃李祭では、クラスの個性を出し、学校全体を鮮やかに彩りました。球技大会や競技大会では、クラス一丸となって取り組むことの楽しさ、大切さを学びました。

研修旅行では、一貫コースはベトナム・カンボジアへ、特進コースはカナダへ、文理選抜コースはマレーシアへ、普通コースは台湾へとコース毎に各国を訪れ、その中で、それぞれの国の文化や民俗を学ぶとともに、現地の人たちとのコミュニケーションを通して、自分の語学力、そして日本という国を見直すことができました。

部活動では、１、２年次に先輩方から学んだこと、受け継いだことを生かし、練習に励みました。そして、いざ、自分たちの最後を飾る時に起こったのが、新型コロナウイルス感染症でした。

新型コロナウイルスは猛威を振るい、私たちに試練を与えました。３年次の最初には休校を余儀なくされ、当たり前に登校し、他愛のない会話をすることすらできない日々が続きました。学校が始まってからも、行事や部活動の大会、コンクールがなくなり、入試の時期を迎えても、収まるどころかかえって拡大し続け、この先どうなるのかという不安に押しつぶされそうになることも多々ありました。部活動では結果を残せないまま、「引退」と言う文字が脳裏を何度も過りました。何気ない日常を送ることがいかに幸せなことであったかを身に染みて感じさせられました。

しかし、そんな時に救ってくれたのは共に過ごしてきた「仲間」でした。徐々に代替大会やコンクールが開催されるにつれ、最後までやりきることの大切さを仲間が教えてくれました。この出会いは生涯忘れることはありません。本当にあ

りがとう。それぞれの道で新しい目標に向かってお互いに頑張っていきましょう。そして、いつかウイルスが終熄したら、思いっきり大声で話をしましょう。

また、このような不安の中、的確なアドバイスを下さり、親身に指導して下さったのは先生方でした。時には厳しく指導して頂いたお陰で、この荒波を乗り越えることができました。本当にありがとうございました。

そして、一番近くで、どんなに迷惑をかけても支えてくれたのは家族でした。毎日の昼食や励ましの言葉、本当にありがとうございました。普段は照れくさくて感謝を伝えられない家族に「ありがとう」を伝えたいと思います。

新型コロナウイルスは未だに収まる気配を見せません。この先もまだまだ見通しが立たないでしょう。諸行事も部活動も、この先臨機応変に、その時にできることを懸命にやるしかないと思います。在校生の皆さん、本当はこの場に出席して欲しかったです。皆さんは体育祭や送別会を、工夫を凝らして開催にこぎ着けてくれました。本当にありがとう。皆さんなら、この大変な時期でも成蹊高校の伝統に新たなページを紡ぐことができます。成蹊生として胸を張って、この難局を乗り越えていって下さい。

いよいよ学び舎を巣立つ時がまいりました。この３年、特に最後の１年で学んだことは、どんなに高い壁でも、乗り越えられない壁はないということです。これから巣立つ社会はより困難な道でしょう。しかし、この成蹊で培った「桃李不言下自成蹊」の思いを胸に、私たちは困難を乗り越え、「朝も昼も夜もずっと同じ所にある、暗闇に響く一番星」になるべく、一歩一歩歩み続けていきます。

最後に、本日の卒業を迎えるに当たり、私たちに関わって頂いた全ての皆様に感謝申し上げますと共に、母校、福島成蹊高等学校のますますの発展をお祈り申し上げ、答辞と致します。

令和３年３月１日

卒業生代表　橘　内　愛　未

【答辞委員】

一貫コース	中村	夏
特進コース	江崎	瑠莉
選抜コース	橘内	愛未
普通コース	佐藤	夏香

祝　　辞

本日ここに、晴れて卒業式を迎えられた皆さん、御卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

また、今日の晴れの日まで、子どもたちに限りない愛情を注ぎ育んでこられた御家族の皆さん、建学の精神に基づき情熱をもって教え導いてこられた教職員の皆さん、さらには温かい御支援と御協力を賜りました地域の方々に対しまして、深く敬意と感謝の意を表します。

東日本大震災から間もなく１１年目を迎えようとしている今般、新型コロナウイルス感染症が世界各国で猛威を振るい、福島県にも深刻な影響をもたらしました。そのような中でも、ＪＲ常磐線が全線で運転を再開し、福島ロボットテストフィールドや東日本大震災・原子力災害伝承館等の新たな拠点施設が完成するなど、県民の皆さんの懸命な御努力により、本県の復興は着実に進展しております。

卒業生の皆さんは、最終学年の大切な時期に一斉休校や学校行事の制限等もあり、不安や戸惑いの多い一年だったと思います。部活動においても、集大成となる各種大会が中止となり、つらく悔しい思いもしたことでしょう。そのような中でも、感染防止対策をしながら着実に歩みを進めてきた皆さんのひたむきな姿とその活躍は、県民に勇気と希望、感動を与えてくれました。これまでの学校生活の中で培った幅広い教養とかけがえのない友人とのきずなは、生涯の財産となるはずです。今後は自らが進んだ道に向かって力強い一歩を踏み出し、それぞれの道で個性や能力を存分に発揮することを期待いたします。

県内企業や会津大学が開発に参加した小惑星探索機「はやぶさ２」のミッション成功は、私たちに“挑戦”と“継続”という二つの大切なことを示してくれました。高いハードルに何度も挫折し、幾多の困難に見舞われる中、それでもあきらめずに挑戦を続けたことで、世界が賞賛するすばらしい成果を目の当たりにすることができました。私たちも今、福島の復興・創生、さらには新型コロナウイルス感染症への対応など、数多くの困難なミッションを抱えています。「挑戦が力を生み、継続が力を深める」この言葉を胸に、福島の明るい未来を実現するために共に“挑戦”を“継続”していきましょう。

結びに、皆さんの前途に幸多からんことをお祈りし、新しい旅立ちに当たってのお祝いの言葉といたします。

令和３年３月１日

福島県知事　内　堀　雅　雄

祝　　辞

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

本日、晴れて卒業証書を手にした皆さんは、それぞれに将来への夢を抱き、喜びと充実感で胸がいっぱいのことでしょう。

入学からこれまで、勉学や文化・スポーツ活動などに打ち込んだたくさんの思い出と、喜びや悲しみを分かち合った仲間との友情は、かけがえのないものとなったはずです。

また、皆さんの健やかな成長をあたたかく見守り、今日の日を心待ちにしてこられたご家族の皆様、そしてこれまで熱心にご指導くださいました校長先生はじめ先生方も、感慨一入のことと思います。心よりお祝いを申し上げます。

いよいよ明日から、それぞれ志す道への第一歩を踏み出すことになります。

皆さんは、小学生の頃、東日本大震災と原発事故に遭遇し、高校生活の大切な時期、新型コロナウイルス感染症に翻弄されました。二つとも辛く、苦しい経験でしょうが、この経験をぜひ皆さんの財産として、前向きに生かしてほしいと思います。

今日の日を迎えることができたことを大きな自信にして、これからも出来得る限りの努力を惜しまず、立ちはだかる困難を一つ一つ乗り越えていってください。むしろ困難な時ほど、自分や周りを変え、成長させるチャンスです。強い意志を持ち、ぜひチャレンジし続けてください。道は必ず開けます。

今日まで皆さんの成長を支えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れず、「ふるさと福島」に誇りを持ち、新しい福島づくりの主役として力強く歩んでいかれることを期待しています。

夢や希望に向かう皆さんの洋々たる前途を祈念して、お祝いの言葉といたします。

令和３年３月１日

福島市長　木　幡　　浩

校歌

わが学び舎の
　名もゆかし
桃李の花の
　匂へれば
ものいはねども
　慕ひくる
かげやこみちと
　なりぬべき

金剛石の
　みさとしに
阿武隈川の
　よどみなく
進みゆく世に
　遅れじと
いそしむ技の
　楽しさよ

仰げば尊し

一、仰げば尊し　わが師の恩
教えの庭にも　はやいくとせ
おもえばいととし　このとし月
今こそわかれめ　いざさらば

二、たがいにむつみし　日ごろの恩
わかるるのちにも　やよわするな
身をたて名をあげ　やよはげめよ
今こそわかれめ　いざさらば

三、朝夕なれにし　学びの窓
ほたるのともし火　つむ白雪
わするるまぞなき　ゆくとし月
今こそわかれめ　いざさらば

蛍の光

一、蛍の光　まどの雪
ふみ読む月日　かさねつつ
いつしか歳も　すぎのとを
明けてぞけさは　別れゆく

二、とまるもゆくも　かぎりとて
かたみにおもう　ちよろずの
心のはしを　ひとことに
さきくとばかり　うとうなり